

2022年1月2日 礼拝説教要旨

詩編講解説教91「信頼の歌」

詩編91：14～16、Ⅱコリント1：18～20

詩人は旅をしているようです。「天幕」(10節)「道」(11節)という言葉があります。しかしその途中でこの人は様々な困難に直面します。「仕掛けられた罠」(3節)「夜、脅かすもの」
「昼、飛んでくる矢」(5節)「暗黒の中を行く疫病」「真昼に襲う病魔」(6節)「石」(12節)
「獅子と毒蛇」(13節)これらの言葉がそれを表します。しかし「いと高き神のもとに身を寄せて隠れ、全能の神の陰に宿る人よ」(1節)とあるように、詩人は神さまのもとに隠れ、神さまのもとに宿ります。4節には「神は羽をもってあなたを覆い、翼の下にかばってください」とあります。神さまのところに身を寄せて休む平安がそこにあります。そこでは「あなたには災難もふりかかることがなく、天幕には疫病も触れることがない」(10節)のです。神さまの完全な守りの中に置かれる。そういう場所を持つ幸いがかここには語られています。

年の初めの礼拝でこの詩編第91編を読むことの意味を改めて覚えます。年の歩みを旅に譬えることもできるでしょう。この旅路に何が起こるのか、それは誰にも分かりません。すでに困難な旅路が予想されます。世界はなおコロナウイルスの脅威にさらされています。もう二年になりますが、恐らくはまた大きな波が来るでしょう。また個々の歩みにおいても病いが襲うことがあります。人生の計画、思い描いていた将来が音を立てて崩れていきます。しかし一つだけ確かなことがあります。それはどのような時も、わたしたちは神さまのもとに逃れることができるということです。そこでは「災難もふりかかることなく、天幕には疫病も触れることはない」(10節)のです。「主はあなたのために、御使いに命じて、あなたの道のどこにおいても守らせてくださる」(11節)これは何か迷信的なものではなく、イエス・キリストによって与えられる救いの約束を示しています。わたしたちにとって困難なこの世の旅路も、キリストによって神さまの守りの中に置かれることを信頼してわたしたちは新しい年を歩み出すのです。

ではなぜわたしたちは神さまを信頼できるのでしょうか。その信頼の意味を考えましょう。今日は特に最後の部分14～16節のところを読みました。この部分は括弧で括られています。ここは神さまご自身の語りとなっている部分です。ですからここでの「わたし」は神さまであり、「彼」は信仰者のことを指しています。この「彼」は「わたしを慕う者」「わたしの名を知る者」(14節)とあります。「慕う」と訳された言葉はハーシャクという言葉ですが、これには「愛する」「しがみつく」という意味があります。これは男女の恋愛を意味するような言葉です。愛するゆえに親しく寄り添う、相手にもたれかかるような意味です。我が家には猫がいるのですが、猫は非常に甘え上手です。体をすり寄せたり、よく頭をぶつける仕草をする。なぜこのような行動をするのかと調べてみますと愛情表現だということです。親しみを込めて相手に頭をぶつける。ぶつけられた方もそういう仕草にだんだん愛おしさを感じるようになる。そうやって愛情を体で表現する。愛するというのは、単に言葉だけではなく、行動が伴うこと。体当たりのように体で表現する。そのようにしてこそ伝わるものなのでしょう。

また「名を知る」とありますが、この「知る」という言葉やアダーも知識として知ることではなく、旧約聖書では男女関係を表す言葉でもあります。創世記4章1節「アダムは妻エバを知った」というのは肉体的な関係、親密な関係のことです。ですから神さまの名を知るといふのは、それだけ神さまと親しい関係にあるということです。古代世界では名は特別のもの

で名を知ることが相手を知ることであり、相手を支配することでもありました。だから相手に支配されないために本来名前は簡単に明かさないので。ですからわたしたちが神さまの名を知ること。それは逆を言えば、神さまがわたしたちに名を知らせるということですが、それはそれだけ神さまがわたしたちを特別に見ておられるということです。

何れにしても、「慕う」ことも「名を知る」こともそれは神さまとわたしたちが親しい愛の関係の中にあることを示します。そしてその神さまへの愛は、わたしたちの側の愛というよりは、むしろそれに先立って神さまの方がわたしたちを愛されたことに起因しています。神さまはわたしたちにご自身の名を知らせてくださいました。出エジプト記にはモーセに対して神さまがその名を知らせるところがあります。「わたしはある。わたしはあるという者だ」（出エジプト 3：14）そのようにしてわたしたちにご自身をあげ渡される。それは神さまの愛と信頼のゆえであります。そしてその信頼はイエス・キリストをこの世にお遣わしになられたところに決定的に表されました。神さまはわたしたちに愛する御子を惜しまず委ねられたのです。その御子を通して、わたしたちが神さまとつながることができるようにしてくださった。御子の名を通して神さまに祈ることができるようにしてくださった。そのようにわたしたちを信頼してください。だからわたしたちも神さまを信頼するのです。

愛は言葉だけではなく行動が伴うということを申しました。14～16節にはいくつもの動詞を確認することができます。14節には「逃れさせる」これは英語ではデリバー「運び出す」「救い出す」と訳します。「高く上げる」これも英語ではプロテクト「守る」という訳です。15節「答える」「共にいる」「助ける」「名誉を与える」16節「満ち足らせる」「見せる」これらの動詞は、いずれも神さまの側の行動です。その救いの約束がここにあります。そしてその救いの約束はすべてイエス・キリストによって表され、成し遂げられました。今日読みました新約聖書のⅡコリント1：20にありましたように、これらの約束はすべてキリストにおいて「然り」アーメンとなったのです。そして最後は十字架でご自身をささげておしまいになる。そのようにして体当たりで、わたしたちを愛し、その約束を果たしてくださいました。

今はいろいろと行動が制限される時代です。また年齢的に、あるいは病いを得て、思うように行動できないということもあります。でもできるところで神さまの愛と信頼に応えていきましょう。礼拝も奉仕も、祈ることも、誰かに手紙を書くことも電話をかけることも、それは愛の業です。それをしないならば伝わるものも伝わりません。不器用でもいいのです。もっと体当たりで、ストレートに愛を伝えたい。そのような生き方ができるのは素晴らしいことです。